

‘呪われた血’の叛逆詩人 (3)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第一章 生い育ちし日々と揺れ動いた青春

〔1〕バイロン像——二つのバイロン

〔2〕生い育ちし日々 (1788 1805)

〔3〕揺れ動いた青春 (1805 1808)

本稿のテーマは、前稿〔1〕〔2〕に続き〔3〕において

——詩人の生い育ちの背景的考証により、

バイロン文学のルーツを探る——ことである。

〔3〕揺れ動いた青春

Byron は 1805年春、Harrow を卒業。10月 Cambridge 大学、Trinity College に入学。

‘The Hours of Idleness’—‘懈怠集’は その title-page に はじめて 彼の名前をのせた 処女詩集 である。

詩人は、Cambridge ケムブリッジに入学して、詩人として立つ決意を固め、処女詩集の出版へと踏みきった。それは、

Harrow までの 数奇な運命、生ひ立ち、そして 数々の悲しき思ひ出への袂別をも意味し、新しく、詩人への飛翔の心を誓うものであった！

'ON THE DEATH OF A YOUNG LADY',¹⁾
COUSIN TO THE AUTHOR, AND VERY DEAR TO HIM.

1. HUSH'D are the winds, and still the evening gloom,
Not e'en a zephyr wanders through the grove,
Whilst I return to view my Margaret's tomb,
And scatter flowers on the dust I love.

2. Within this narrow cell reclines her clay,
That clay, where once such animation beam'd;
The King of Terrors seiz'd her as his prey;
Not worth, nor beauty, have her life redeem'd.

3. Oh! could that King of Terrors pity feel,
Or Heaven reverse the dread decree of fate,
Not here the mourner would his grief reveal,
Not here the Muse her virtues would relate.

4. But wherefore weep? Her matchless spirit soars
Beyond where splendid shines the orb of day;
And weeping angels lead her to those bowers,
Where endless pleasures virtuous deeds repay.

5. And shall presumptuous mortals Heaven arraign!
And, madly, Godlike Providenc eaccuse!
Ah! no, far fly from me attempts so vain!;—
I'll ne'er submission to my God refuse.
6. Yet is remembrance of those virtues dear,
Yet fresh the memory of that beateous face;
Still they call forth my warm affection's tear,
Still in my heart retain their wonted place.

1802.

[First printed *December*, 1806.]

1) The author claims the indulgence of the reader more for this piece perhaps, any other in the collection; but as it was written at an earlier period than the rest (being composed at the age of fourteen), and his first essay, he preferred submitting it to the indulgence of his friends in its present state, to making either addition or alteration.

[“My first dash into poetry was as early as 1800. It was the ebullition of a passion for my first cousin, Margaret Parker (daughter and grand-daughter of the two Admirals Parker), one of the most beautiful of evanescent beings. I have long forgotten the verse; but it would be difficult for me to forget her—her dark eyes—her long eye-lashes—her completely Greek cast of face and figure! I was then about twelve—she rather older, perhaps a year. She died about a year or two afterwards. . . . Some years after I made an attempt at an elegy—a very dull one, ”*Letters*, 1901, v. 449.

[Margaret Parker was the sister of Sir Peter Parker, whose death at Baltimore, in 1814, Byron celebrated in the “Elegiac Stanzas,” which were first published in the poems attached to the tenth edition of *Childe Harold* (1815).]

“マーガレット 若く逝く”

——その女性は詩人の従姉で、詩人にとってきわめて親しい間柄だった。

試訳

- 1 ^{ゆうべ}夕 ^{しづもり}しづもり
^{せいひつ}静謐 ^{よどむ}よどむ
 花を撒く汝が
 ‘マーガレットよ、
 風^な 凪^ぎて
 奥^{おく}津^{つき}城^{じやう} に、
 墓^は標^かの^へ辺^へに、
 靈^{たま}魂^{しづ} 鎮^もれ^れと
- 2 ^{むくろ}亡^{ねむ}骸^むは永^{えい}眠^{めい}る
^{かがよ}耀^{えい}ひし汝^にの
^{いけにえ}儀^ぎ と召^{めい}す
^{あらが}あ^{すべ}ら^くが^く 抗^かふ^く術^{じゆつ}なく
 せ^あま^なき^あ墓^ぼ穴^{けつ}
 その ^{いのち}生^{せい}命^{めい}
^{やみおう}黄^{わう}泉^{せん}王^{わう} に
 美^うしく^ゆ逝^しく
- 3 ^{あわれ}憐^{れん}み ^{あらば}あらば
 その^{のり}宣^{せん}告^{こく}なくば
^あ吾^が ^{かなしみ}哀^{あい}悼^{たう}を
 詩^しう^{こと}こ^{とな}し
^{やみおう}黄^{わう}泉^{せん}王^{わう} の、
 天^{てん}帝^{てい}の、
 告^こぐ^るなく、
 汝^なを^たた^なへ^ん
- 4 ^{たま}靈^{れい}魂^{こん}翔^{せう}け^ゆく^を
 御^ご座^ざの^{かな}た^たに
 導^{どう}き ^ゆき^て
^{やす}安^{あん}息^しら^ぐ ^{しとね}褥^{じよく}
 な^なぜ^にに^な悼^{たう}く
 天^{てん}使^しら^が、
 法^{ほふ}悦^{えつ}の
 敷^ふき^のべ^む
- 5 ^{うつ}現^{げん}し^身 神^{かみ}を
 摂^{せつ}理^りを ^呪ひ
^{しよせん}所^{しよ}詮^{せん}は ^{むな}虚^こし
^{すなほ}恭^{こう}順^{じゆん}に ^{あらむ}あらむ
 責^せむ^{ると}も
 狂^{きやう}ふ^{とも}
 う^べな^ひて
 天^{かみ}意^いな^らば
- 6 ^{されど}されど ^{かな}哀^{あい}しく
 の^こり^か香^{かう}秘^ひめ^し
^は美^みし ^{かんばせ}顔^{がん}も
 涙^{なみだ}を ^さそ^ふ
 か^かぐ^はし^き、
 汝^にゆ^えに
^{あた}鮮^{せん} ^らしく
 汝^に ^し逝^して

^{うたかた}
泡沫の如く、はかなく、透明な恋だった！

七色の虹の如く、詩人——12才——に、はじめて、うたごころをかきたててくれた Margaret マーガレットだった！

多感な詩人——14才——にとって、Margaret の死は、あまりにも、悲しく、いたましく、——‘死の世界’をあこがれるほどに——虹の残像は、いっまでも消えることはなかった！

‘FRAGMENT’

WRITEN SHORTLY AFTER THE MARRIAGE
OF MISS CHAWORTH.

1. HILLS of Annesley, Bleak and Barren,
Where my thoughtless Childhood stray'd,
How the northern Tempests, warring,
Howl above thy tufted Shade!
2. NOW no more, the Hours beguiling,
Former favourite Haunts I see;
NOW no more my Mary smiling,
Makes ye seem a Heaven to Me.

1805.

[First published, 1830.]

“断章”

——チャーワース、嫁ぎてまもないころの詩——

(試訳)

- | | | |
|---|----------------------------|------------------------------------|
| 1 | ^{おきなび}
少年期、無心に | ^{さまよ}
彷徨ひし |
| | アンズリーの丘 | ^わ ^た
侘びて佇つ |
| | 今、北風は | 猛り吼え |
| | 房なす 樹海 | さわぎつつ |

- 2 ‘とき’は欺く ^{なら}習ひ、世の
 しげく訪ねし ‘かの館’なく
 優しきメリーの ^{えみ}微笑は消え
 天女と恋ひし ^とひとさりぬ

(1805年の作詩)

^{おきな} 稚い作品である。詩人17才の作。Harrow ハロー校を卒えて、Cambridge ケムブリッジへ入学する直前の8月、Mary Chaworth メリー、チャーワースは John Musters と結婚。Chaworth チャーワース家にとって、Byron バイロン家は、怨念の家柄である。その意味で、Mary メリーとの出会いは運命の皮肉なめぐり合わせだったが、その Mary メリーを天女の如く、生涯の最高の理想の女性として、高峰の花として焦れ、慕うたその恋心は、ついに^{みが}実ることのない、片想いに終り、その後の交友はあったにせよ、詩人の心の中に終生、スパイラルを描きつつ巣喰いつづけた^{こが}悲恋であった。最も多感な Harrow ハロー時代、味わった、生々しくも痛ましい^{ベイツ}経験だっただけに、^{ベイツ}哀感が——失恋にじっと耐えている詩人のポーズを、かいまみるとき——ひしひしとせまりくる詩(うた)である。舌たらずの稚い作品であるがゆえに、かえって痛々しく訴えてくる^{うた}詩である。

‘TO MARY CHAWORTH’.

- AH, Memory torture me no more,
 The present's all o'ercast;
 My hopes of future bliss are o'er,
 In Mercy veil the past.
- Why bring these Images to view
 I henceforth must resign?
 Ah, why those happy hours renew,
 That never can be mine?

3. Past pleasure doubles present pain,
To Sorrow adds regret:
Regret and Hope are both in vain,
I ask but—to Forget.

1804.

[First published, Paris, 1831.]

“メアリ，チャーワース”へ

(試訳)

- 1 思ひ出に ^{いた}傷む われを^す擲て
今は かき曇る ころのみ
未来を^か翔けし 夢は 消え
過去は ^{あはれ}隣みに つつまれぬ
- 2 なぜに 浮^くび来 おもかげが
ふりすてるべき わが過去の、
なぜ、よみがえる ^{たの}悦樂し日日
許されずして 秘めおくを
- 3 ^{よろこ}歡び ゆえに 苦は増すを、
悔ゆるがゆえの ^{かな}哀しみも、
悔も ^{のぞみ}希望も ^{むな}虚しくて
ひたすら^{のぞ}希求む 忘却を

(1804年の作)

これも、詩人16才の作。Harrow ハロー時代の失恋のうたとして稚い筆致ゆえに、かえって、痛々しく、哀感をそそる。

Cambridge ケムブリッジは、三十いくつの、カレッジを一処にあつめた美しい森の都である。詩人の園であった。今でも、そのキャンパスの森を流れる Cam ケム川には、プリム、ローズの膚色^{はだ}をした ブロンドの美しい金髪娘が白、黄、ブルー、ローズ、色とりどりの水着^{みづぎ}をきて、ダンディな若者とボート遊びに興じ、川辺のグリーンの鮮やかな芝生に寝そべり、青春を私語^{ささや}き合う——

詩人も、この Cam ケム川で、泳ぎ、興^{きよう}じ、いくつかのバイロン神話を、この Cam ケム川にのこしていった——

Cambridge ケムブリッジ大学を訪う人は、きっと 詩人の学んだ Trinity College トリティ、カレッジ、そして、キャンパスの中の Wren の 図書館に 足を運ぶとよい。

そこに立つ、Byron バイロンの全身像——歴代 Cambridge ケムブリッジの産んだ、世界的詩人、文豪達の、等身大の肖像画、そして 遺集が両サイドにずらりと display されている。その室内の 中央、奥に、この詩園に遊んだ多くの詩人群を、睥睨^{へいげい}する如く、一つだけ、雲をつく如く、屹立する白無垢の優雅な バイロン像は、詩人の生涯愛した 女性を 足許^{はべ}に待らせている——18世紀の、まさに因襲的時代より、19世紀動乱の時代に、自由の翼^かを翹けた、叛逆詩人、熱血詩人、男伊達バイロン卿の 艶で姿である。

Westminster ウェストミンスター の Poets' Corner が1世紀半の間、詩人を冷遇し、この英雄詩人の殿堂入りを拒否しつづけた事実を 詩人は今、シニカルな微笑かをうべ、おおらかに 私達に語りかける——そして母校 Cambridge ケムブリッジは、この天才詩人を温く、そして 最高に 処遇することを忘れなかった！

この立像が、これに対峙^じする人の心に、一目にして、人間 Byron バイロン、

そして Byron バイロン文学のすべてを、語りかけてくれるが如き、深き感動を訴えかけてくる！

とまれ——

どぶろく
濁酒が醸酵する如く、Harrow ハロー校までの幼少期を耐えてきた詩人の、
心の鬱屈うつくつが醸しだした、そして、悪酒・深酒に泥酔した——荒れに荒れた、吐ほ
えた、狂った、詩人の——Cambridge ケムブリッジ時代の、青春編 は 炸裂まくれつ
する。

バイロンは1805年7月の終りまで Harrow ハローにとどまり、その10月20日、Cambridge ケムブリッジ大学の Trinity College の寮に入った。そして 1808年の春、貴族の特権によりマスター・オブ・アーツ Master of Arts の学位を得て、卒業する。

しかし、その間、1807年間は丸一年、大学は欠席し、一無断欠席— Burgage の荘園——Southwell サウスウエルの母の館——と Piccadilly ピカデリーに与えられたアパートとの間をゆききして 過した。

Cambridge の生活は、バイロンにとって、良かったというよりも、むしろ悪影響を与えたことの方が多かった。

11月6日、姉に話したところによると、‘年間、500 ポンドの最もゆたかな学資をあてがわれ、また、馬一頭と、一人の召使をあてがわれた’。

そして、又、二週間後の 11月23日、John Hanson の忠告の手紙に、次の如く返事を書き送っている——

‘僕は、放蕩、浪費の生活を、にくみ、きれいなながらも、自分では、どうもできないで、混乱した頭で、机に向っている’——と。

‘Cambridge ケムブリッジは、少なくとも、この寮は、僕にとって悪魔のすみ家だ’と感懐をもらした。

18才に満たざる大学生にあてがわれた年間 500 ポンドの学資、そこに因果をめぐり、悪魔が立ちまはばかり、つけ入ったとも 考えられる。

Hanson ハンソン——Byron バイロン家の顧問弁護士——は大変おどろき、そして立腹し、痛烈に抗議した。

これに対して、Byron バイロンは、

‘僕は、ここ Cambridge ケムブリッジでも、Harrow ハローでも、僕の生活を恥じてはいない。ケムブリッジも、大学も、僕の遊蕩生活のことを少しもわかって来てはいない。わかってくれようとはしない。’——と書き送っている。

しかし、Byron バイロンは、大学には、最初の一学期だけしか 行かず、それ以後の手紙は、^{さんげ}嬌慢と懺悔——うつうつとして心楽しまず無為のこころ、について——にみち溢れている。

悪を^{てら}銜う、偽悪者であるが如く、世人が、バイロンを 評価するならば、それは——^{おろか}愚であらう。

Byron バイロンは poser (気取屋) である との評価 が一部に行われたこともある。——愚かしい、盲人的対巨像観である。

Byron バイロンは自分自身に関する——うそ偽りのつくり話ではなく——真実についてのみ、関心を示し、自分の友人がショックを受けようと、興味を示そうと、そんなことには、まったく無関心、無頓着であった。

自分の寛大な感情を^{たつと}尊び、つねにその感情に訴えた気持は、学寮の友人達も、これを制することをしなかったし、また、できなかったということが、彼にとっては、せめてもの ながさめだった。彼は彼の本領を逸脱し、Wordsworth ワーズワスと同じく、時代と場所をはみ出した人物であり、ただし、彼の

場合、Milton ミルトンの思い出を温存し、これに耽溺して無為に、ひとり、ふけることは決してなかった。

Cambridge ケムブリッジの学寮生活の放縱の間に、しかし、多くの友人をもつことが出来、彼等の尊敬をうけた。後年、ギリシャの巡礼の旅に同行したHobhouse は生涯を通じての良き友となった。

Byron バイロンにとって——Cambridge ケムブリッジの生活が、無為であったとしても、(彼のケムブリッジ時代は) 結果的には、^{みの}実り多きものがあった。と言うのは、

大学の外に、多くの友人をつくり、詩人として立つ決意を固め執筆生活を始める決意を固めた。

Newstead Abbey の館は Grey de Ruthyn 卿に貸して、バイロンは——数ヵ月間ひきつづいて、Trinity トリニティーの大学寮にも、ロンドンの独身寮にもいないときは——Southwell の母の家で、いっしょに暮らした。——そしてその間、Cambridge ケムブリッジ大学の学生として、将来を嘱望される地方の名士として、Byron バイロンは、彼の母の友人たちや、隣人、牧師、医師、お役人たち、そして——Miss Austen ミス・オースチンの読者たちには、おなじみの、——あのなごやかな地方の家庭的良家の人々から、当然のことながら、慕われ 尊敬された。

Yet Byron's changeability was uppermost. His hot youth found other congenial outlets. 'College is not the place to improve either Morals or Income', he wrote sententiously to Hanson. So whither

must he go but London, where his morals immediately took a dive into debauchery and his finances into the clutches of the usurers.

Like other young sparks of his day he referred to the latter as 'sordid Bloodsuckers' and 'Tribe of Levi'; nevertheless his philosophy of sensation did not allow him to live without them. (Elizabeth Longford: Byron)

揺れ動く詩人の心の激動は、瞬時も 静止することはなかった。そして、その激情の吐け口を求めて、詩人の青春は 荒れに 荒れた。

顧問弁護士 Hanson ハンソン宛に '大学とは、品性を高め、生活（経済的）の向上を期する為に ゆくところではない'。と、一言、^{ひとこと}金言めいた 所信を書き送っている。

かくして、ロンドンの遊蕩生活に耽り、吸血鬼呼ばわりしながらも、高利貸の世話になり、泥沼の生活へと のめりこんでゆく。

He stayed first at 16 Piccadilly. The great John Nash had not yet built the new Regent Street at the end of Piccadilly, under whose splendid arcading would soon gather hordes of prostitutes. (The arcades had to be demolished.) But 'Paphian goddesses', as Byron called his collection of blue-eyed Carolines and Coras, were never in short supply and he could rehabilitate himself by frequenting the Bond Street rooms of 'Gentleman' Jackson the boxer and Henry Angelo the equally gentlemanly fencing instructor. His landlady, his sister, his mother and Hanson were all called upon to help raise loans. 'Your last Letter, as I expected', he wrote to Hanson, 'contained much Advice but no Money.' It was all to be in *Don Juan*: (E.L)

ロンドンでは、最初、Piccadilly ピカデリー 16番街にすむ。その当時は、まだ、その一角に、新しい Rogend Steet は、完成されてはいなかったもの、やがてそこにすばらしいアーケードができ、売春婦がたむろする巢窟となる。

詩人は、この碧い目の辻姫達——みずからは、Paphian Goddesses ‘パフィアン の女神達’と呼んだ——と、歡樂、遊蕩 三昧の生活ふけに耽った。

もっとも、名誉回復のため Jackson (boxer) や Henry Angelo (fencing の教師) との紳士的交友をももち、その道場に足繁く通り、その道に励みはしたものの……。

かくして、詩人の父 “Mad Jack” (気狂いジャック) の血に恥じざる遊蕩を重ね名門 Cambridge ‘ケムブリッジの蕩兒’ バイロンが、華やかにデビューするのであるが、その負債を処理すべく、詩人の宿の女主人、詩人の姉、母 Catharine キャサリン、弁護士 Hanson ハンソン、が総動員されて、金策に奔走させられる。

献身的顧問弁護士 Hanson ハンソン宛に

“前回の貴殿の手紙には、私の期待にたがわず、送金はなく、只喋喋喃喃ちようちようなんなんと忠言、苦言、くりごと諛言あるのみ”。

と書き送って、反省の色なく、平然として、性格破綻者はたんの一面を暴露する。

このへんの事情はのちの、彼の最高傑作、長編諷刺詩 Don Juan ドン ジュアン にくつきりと描かれるのである。

*Let us have wine and women, mirth and laughter,
Sermons and soda-water the day after.*

酒よ 女よ さざめき 笑らぎ
 醒むれば苦き ソーダ と 繰り言

Hanson's thankless task included freeing a Byron family estate at Rochdale in Lancashire from the legal entanglements created by the 'Wicked Lord', and selling it before the young lord's majority. Hanson never succeeded; but twice while at Cambridge Byron was excited by the news of an imminent sale, first for £30,000, then for £60,000. With such a prospect tantalisingly within reach but never in his grasp, his debt of £10,000 to the moneylenders seemed less outrageous. (E. L.)

Byron バイロンの高利貸への10,000 パウンドの負債の返済のため、Hanson ハンソンは、Lancashire, Rochdale の , Byron バイロン家の所領を売却しようとして奔走する。これは 先代 (第5代, 'Wicked Lord' 悪殿様 が醸した法的紛争を解決しなければならず——最初は 30,000 パウンド, 次回は 60,000 パウンドで Byron バイロンが Cambridge ケムブリッジ滞在中, 今にも 売れそうであったが——なかなか うまく 処分できなかった。

Byron バイロンにとって、高利貸への10,000パウンドの負債も、これが 処分できれば、もののかずではないという あて があるゆえに、じれったいいらだちを感じたので、献身的 Hanson ハンソンに対して、感謝の気持ちの ひとかけら なく、“忠言無用！ 金 送れ”と 矢の催促で、今は、むしろ 彼が、吸血鬼呼ばわりした 高利貸のほうが、金を左右に 用立てしてくれる という意味では まだしも 内心は 心頼みにした。

そのような遊蕩児バイロンのすがたに、 Hanson ハンソンは 背信的詩人の情 ところ をどのように うけとめたことであろうか？

激怒、憤懣^{ふんまん} の やるかたなき おもい心は 連綿と 繰言^{くりごと}を綴り 度々の
書簡に書き送られたことは 想像に かたくない。

Hanson ハンソンにとって、幼少時より、 詩人への期待が 大きかった
だけに いっそう なお……。

Hot youth! 揺れ動き、荒れに荒れた 詩人の青春! 遊蕩児バイロン!
George Gordon 6th Lord Byron, ジョージ, ゴードン, 第六代, バイロン
卿! 父, John, ‘Mad Jack’ に恥じぬその遊蕩ぶりは、まさに、天衣無縫の
妙なる乱行ぶりであった。

母, Catharine をして, ‘嗚呼, 神もあれ! 愛児^{あこ} 18才にして, すでに 破
滅す!’ と落涙し 慨嘆^{なげ}かしめ, 苦悶^{くもん} せしめ, 奈落の底に つき落した
ほどの 乱行ぶりであった。

母 Catharine が, 熱血たぎる Celt の血をひく名門ゴードン家の落胤^{らくいん}と
しての詩人に, 絶大な希望をつなぎ, ‘濁れた血の Byron バイロン家’をにくみ,
詩人の父 Mad Jack への複雑^{こころ}な情^{なげ}をいだいた 過し方^{としかた}を しのびつつ, 今,
愛児の荒れる生活に 死の苦しみを味ったことは いかにも 首肯^{うなづけ}することであ
り, 典型的教育ママ さながらに, Harrow ハロー——Cambridge ケムブリッ
ジへとエリートコースを歩かせ名門校での紳士教育をひたすらに願ひ, その期
待が大きかっただけにその絶望感^{ひとしほ}は 一入^{ひとしほ}であった。そして, その, 溺愛
したあやまちし教育を悔いつつ, 歯ぎしりするすがたは, 想像に難くない。

Byron バイロンを幼少児より親身となって, 献身的に世話し, みまもってき
た 顧問弁護士, John Hanson ジョンハンソン の掣^{ひんしゆく} 轡^{しゆく}を, さらに, 激怒を
買った, この詩人の乱行は, やがて, ロンドンの高利貸の世話になった生活を

引払い、Southwell サウスウエルへと一時、居をうつすことになる。ときに、18才（1806年）。詩人の36才の短かかった生涯のちょうど、半ばであった。

ロンドンでの遊蕩生活、浪費生活——そのルーツを詩人の幼少期の鬱屈した生い育ちに求めることが出来るのだが——自由を求めて、詩人の青春は、そのように生きるよりほかの生きる道—生き態があるはずはなかった！

詩人の幼少期を怒濤の如く押しよせたあまりにも多すぎた、大きすぎた、耐え得なかったその小さな肩に背負いきれなかった数多くの経験——Harrow ハロー校の卒業期を長期欠席して自らを慰さめ、立派にこころの整理をすませて、Harrow ハロー校に復学し詩人の母——詩人を溺愛し、ひたすらに愛児の成長に期待をかけた、現代流に言うならば、超一流の教育ママであった——の不安をかきけす如く、抜群の成績（卒業成績 三番）でハローを卒えるとき

“母さん！ 僕は後世に名を遺す偉い人になるよ。だから、教室の板壁に、特別大きな文字で BYRON と刻んでおいたよ！” と力強いことばで母を安心させるように言いきった孝心あつい少年 Byron バイロンであったのに！
しかし——

Cambridge ケムブリッジを暴走し始めた大車輪は、もう、その歯止めがきかなくなってしまうていた！

軌道修正はできない—その暴走の轍の虚しさも、走るべきそのスピードも、その描く直線も、すでに用意されたものであった。Byron バイロンは星の子、運命の子！

若者が暴走する！ その暴走に不自然な、物理的力が他から加えられるとき、その若者は、あっけなく、いとも簡単に、死をもって自らの生命を絶つ、よりしかたがない！

暴走か、死か！ 自由か、発狂か！

“ゴードン、バイロンよ！ 暴走せよ！ 詩人はみずからにそう命じ、そう
言い放った！

Cambridge ケムブリッジ 時代の、この暴走は詩人にとって 青春の麻疹^{はしか}
以外の何ものでもなかった！ 選択すべき もうひとつの道があるべくもな
かった！

ひたすら つつ走るべく 用意された、^{まつすぐ}straight な、唯、一本の ^{幾可的}geometric
直線だった。

さもなくば、詩人は、完全な発狂へと、追いつめられたことであろう——
詩人自らがそのように言いきった如く、そしてすべての天才がその道をたど
たように。

E. Longford 女史は、

詩人の遊蕩生活はしかしながら——必ずしも selfish (利己的) なもの
のみに終始し、詩人の母 Catharine キャサリンを、親身の世話を惜しまな
かった Hanson ハンソンをも死の苦しみに 駆りたてた とだけしか考えられ
ないものではなくて、——強きを挫き、弱きを庇う——

彼の ^{にんきよう}仁俠的一面をも 指摘し、詩人への、寛大な、温情的、^{いざま}同情的生き態
をも、温かく凝視つめている。そして

教会への奉仕活動を続ける John Eldeston, Francis Hodgson (Cambridge
ケムブリッジの学友) のためにバイロンは、一膚も二膚も脱いで、又、多額の
喜捨も行ったことを指摘している。そして Eldeston は、その生命を詩人に託
すほどに、熱く炎える仲となるのだが……。これはバイロン mystery として
伝えられている。

ロンドンの生活は、いろいろの点で——金銭的面からも、彼の気分、体質の面からも——詩人には到底 ^む適かない 泥沼の生活へと 彼をつねに巻きこんでいった。かくて1806年5月、次の学期をすこすべく Cambridge ケムブリッジへと ふたたび帰ってゆくのであるが。

‘仕着せ’をきせた従僕をしたがえ 金・銀をちりばめた、装身具を身につけ馬車に乗りこんだ、そのときの詩人の姿はまことに ^{きつそう}颯爽とした男伊達 であった。

かくて、やむなく 1806年は ずっと Burgage の荘園で暮らすことになったものの、母との仲は、まことに 険悪なものとなっていった。

母は 詩人の放縱生活を罵りつつ、悲嘆のどん底にたたき落される。

一方、詩人は母を “気荒な、意地悪い、蛇の如く からみつく女、怪獣、毒樹、鬼婆” とさえ 悪しざまにののしる——仲となっていた。

かくの如き 険悪な 対立にとって、せめて幸運だったことは、少し離れたところに、Pigot ピゴット一家と——特に 6才年上の、そして Augusta アウガスタ（姉）の身替りともいふべき Elizabeth と——の別の家庭 をもつことができたことであった。

今日でも、なお、当地に行けば詩人の名前をしるした壁紙に バイロン・トレド・マークを見ることができのだが—— Elizabeth が来訪者を合図するや フレンチ窓から 颯爽と身をひるがえして さりゆく Byron バイロンのすがたを想像することができる。

これに続く次の三学期の間、Cambridge ケムブリッジでの勉強は放棄し、もっぱら 処女詩集の出版に没頭した。幼少時からの詩を活字にすることに 積

極的に熱意を示したのも、詩人の、心の整理、そして鬱屈した過去への訣別の気持、が強く動いたためであろうか。

“Fugitive Pieces” を1806年11月26日 自費出版して、サウスウエル 近辺で 100部ほど親しい者達へ手渡すが、後で、これらは 4部を除き 全部回収した。

そのいきさつは、

Byron バイロンにとって、良き文学的助言者であった John Becher 師が、詩集の中の一行 ‘Panting’ in a mistress’s arms’

“女の腕の中で 荒く息衝く”

という 描写 をとがめ、

“あまりにも、露骨な、むきだしな表現の きらいがある” と 批評したためである。

Byron バイロンはこの忠言、助言を ただちに、ききいれて、この自費出版の 処女詩集を全部 回収して、彼の面前で焼きすてたのである。

Thomas Moore トーマス・ムア——バイロンの生涯の忠実な、最初の、信頼すべき 伝記作家——は、この、若き日の詩人の‘柔順さ’、創作的態度への謙虚さを 激賞している。

そして今日でもなお、われわれは Southwell サウスウエルの Becker の墓を訪れるとき、この Becker ベッカーの忠言、この Thomas Moore トーマス・ムアの評言、そして 若き日の Byron バイロンの詩作態度への 従順さを想起するのである。

Nothing daunted by the all-too-fugitive nature of his *Fugitive Pieces*, Byron was ready with a second version, also privately printed, in

January 1807: *Poems on Various Occasions*, Some of the vigorously erotic poetry had been replaced by new verses which even Becher must have realised were now rather too tepidly drawn. It was not till the summer of 1807 that Byron at last submitted his poems to the test of publication. 'I have passed the Rubicon', he wrote in the Preface, immediately covering himself with the announcement that poetry was 'not my primary vocation'. This third version, allegedly the fruit of depression, was called *Hours of Idleness*. But the youthful author had been far from idle in other fields. (E. L.)

しかし、この挫折にもめげず、1807年 1月には、Fugitive Pieces の 改版、*Poems on Various Occasions* をだしている（自費出版）。

しかし、Fugitive Pieces の初版における、あの活力に溢れた erotic（性愛的）な作品の いくつかは Becker でさえ、あまりにも、熱意のない、なまぬるい 活気なきものと考えたにちがいないもの——とすりかえられていた。

バイロンは こんこんと湧き出る泉の如く、瞬時の感情を吐露する 詩作態度を好み、推稿を極度にきらった。——‘推稿’によって詩魂は沈透しづくとも、その瞬時の詩心の生命いのちは消える——その意味で、「バイロン詩は、自分自身のことばをもたない詩人」として 一笑に付する ○○学派一派の批判を 新しく考え直して然るべき——これは、ひとつの逸話であろうか？

そして、1807年の夏、はじめて、遂に 詩人は、自分の作品を 世に問うことになった。すなはち、“Hours of Idleness”——「懈怠集」——である。

それは——バイロン自身の、詩人としての出発、詩人としての自覚、そして詩人として立つことへの 決意の表明であり、宣言であった。詩界への挑戦状でもあった。

自分みづからのことばをもたぬ、単なる感傷、単なる想いおもひ、単なる興奮 の 情熱

が 詩として 受け入れられる はずがなかった！

当時、Cambrige ケムブリッジ（大学）は、詩人の巣窟であった！

自称詩人たる宣言にもかかわらず、若きバイロンの詩をもって、Cambridge ケムブリッジ が 入園許可を与えるほど、生易しい Cambridge ‘ケムブリッジ 詩園’ではなかった！ 錚錚たる詩人群のひしめく、うごめくケムブリッジ は、この若造め！ と言わんばかりに、若き詩人 を完膚 ^{かんぷ} なきまでに、果して たたきつけた！

‘I have passed the Rubicon’

“私は ルビコン河を わたった！”

序文に、そうかいた！ ひき返すことは できない！ 挑戦状！ 詩界への、彼のたたきつけた ^{けんか} 喧嘩バイロンの、一步も後へはひかぬ、ある意味で 一種の悲壮感の漂う 挑戦状であった！

果せるかな！ 詩人は、たちまち、たたきのめされ、^{ふか} 深傷 をおい、負け犬の遠吠の如く ‘我が天職は 詩のみにあらず’ と 叫ぶのであるが——

その めいりこむ憂愁 ^{いうしゆう} の中に、若き日の Byron バイロンの、いや 終生を通じて 脈うつ、^{れつれつ} 烈々 たる John Bull 気質、そして Celt 魂 が……

第三歌集、Hours of Idleness (^{けたい} 懈怠集) は、詩人の、沈滞 のくりなした所産 であると言われるが、そして——およそ、詩とは縁遠い、詩人とは おこがましい とまで 酷評 をうけた のである。

He had instituted his famous regime of dieting, violent exercise, ‘*much* physic, and *hot* bathing’, which was to reduce his inherited portliness from an incredible 14½ stone to an elegant 10½ stone. From

this transformation emerged a slim youth of 5 feet 8½ inches with dark chestnut curls, blue-grey eyes, cleft chin, marble brow, and a mobile Grecian beauty.

Thus armed with two irresistible assets—enchancing looks and a published oeuvre—Byron returned to Cambridge in autumn 1807 for his third and last term. His successes enlarged his friendships. The brilliant John Cam Hobhouse—Byron’s much loved ‘Hobby’ to the end—sharpened his interest in the world of politics, and he became a member of the Cambridge Whig Club. Scrope Berdmore Davies and Charles Skinner Matthews were both scholars and wits, the one devoted to gambling, the other to the lewder classics; while the pious and poetical Francis Hodgson, unlike Becher, became a perfect foil for Byron’s daring. (E. L.)

しかし、Byron バイロン——この“懈怠集”の作者——は詩以外の他の分野では idle (けんたい) どころか大変、活動的、行動的だった。

減量——(14½ストーンから10½トーンへと)——のため、規定食をとり、激しい運動、温水浴 ‘much physic, and hot bathing’ という厳しい、積極的
努力をくりかえし、変身して——もともと、天性の美貌ながら——スリムな長
身、濃い栗毛色の捲毛、ブルーグレイの眼、くびれた顎、大理石の額、
流動的ギリシャ的、端正な容姿は、
瞩目すべく、魅力的なものであった。

このように、涙ぐましい努力によって美貌をつくりあげようとする詩人の心底は——うつつした 暗い少年期よりの脱皮をねがう気持であったのだろうか。

そのルーツを探ることは——容易であろう。

かくて、人を悩殺するこの美貌と出版した全作品の一応の成功という二つの宝物をたずさえて、最後の学期をおくるべく1807年秋に Cambridge ケムブリッジへもどった。

詩界への、ある意味での、彼の進出、そして成功のゆえに、Cambridge ケムブリッジでの学友との交りも 広まっていった。

Byron バイロンの終生の友となった才気喚発の秀才、John Cam Hobhouse によって 政治の世界への関心を鼓吹され、Cambridge ケムブリッジ、Whig Club の仲間入りをする。

共に、学者であり、才人である Scrope Berdmore Davis——ギャンブルに熱をあげた——や Charles Skinner Matthews——わいせつな古典文学にこった——との交友。

一方、——Becker とちがって——^{けいけん}敬虔な、詩人 Francis Hodgson は、Byron バイロンの暴挙、冒険への全面的支持者 となった。

Hours of Idleness (懈怠集) は1807年6月出版。

この版で、初めて、‘By George Gordon, Lord Byron, a Minor’ と名乗って、序文をつけたのは、先の Poems on Various Occasions が 意外に、友人や批評家たちから好評と讃辞をうけたことに 大変、気を良くして、本格的な処女詩集刊行への決意を固めたものであろう。

詩人の本格的処女詩集である Hours of Idleness ‘懈怠集’ を世に問うにあたり、(既述の如く) 序文に

“ルビコンの河を渡るべく、^{さい}賽を投げた。” と書き、それは、その複雑な気持の決意のほどを示し、^の伸るか^そ反るか、もうひき返すことは出来ない、詩人と

しての道を歩むよりほかに進むべき道はないことへの厳しい自己への宣言、申し渡し、であった。それは、とりもなおさず——

当時の風潮であった、批評家たちが、自己の名声のため、小細工を弄してまでする、意識的悪意にみちた酷評——をうけて立つ 毅然たる、若き日の Byron バイロンの覚悟のほどを示す身構え であった。

——しかし、その身構えは、即ち、自分は、うちのめされるであろう、逐語的、細部についての、底意地の悪い批評に克ちうることは、自分の未熟さゆえに、至難のことであろうという、大いなる不安と表裏一体するものであった。

ところが——この不安に反し、この処女詩集は、意外と好評を博し、The Critical Review は、詩人の諷刺の才の芽生えを高く評価し、The Monthly Review も、諷刺 (satire) を——哀調 (pathos) と力 (strength)の二面性を指摘し 若き日の詩人の才のひらめきを讃えている。

—— しかし 翌年、1808年、果せるかな、バイロンの不安は現実となった。それは、The Edinburgh Review が、この詩集を 血祭りにあげた。^{いけにえ}犠の小羊に襲いかかる wolf (狼) の如く、まことに、殺伐な敵意にみちた、攻撃的、酷評であった。

——この若造の詩は、神も人も、許し難い——
詩人自ら、未成年であること、貴族であることを強調し、詩の不評へあらかじめ備えたこと——
そのこと自体が嘲笑に値する、
Pope 12才の作を自作と比べたこと、

押韻的技法のみが詩のすべてではない——

といった酷評が、匿名の批評家によってなされ、詩人の若き日の情熱を吐露した詩文を“澱んだ、くさった水”として一笑にふし、さっさと片づけてしまおうとした。

この匿名の主を詩人は長い間、その主筆の Francis Jeffrey と誤解したが、実は、Henry Broughham の筆になるものであった。

この節度を欠いた、適正さを欠いた、敵意にみちた酷評に、過激な論調に対し——

温厚な Wordsworth さえ、憤慨し、若き無名の、そして未知の Byron バイロンのため、大いに弁護し、又、Cambridge ケムブリッジの学友達、詩人をとりまく一連の詩友達も、バイロンのために激昂した——
それほど、この酷評は卑劣 極まる不当なものであった。

この酷評に、とにかく、詩人は、大変な ショックをうけたことは事実であるが、彼を支持し、とりまく、そして彼を愛する、尊敬する多くの学友、知識人たちに擁護されて、わずかに、その 憤懣を慰められるのであるが——

若き バイロン は、自尊心を傷けられ、執拗なまでの復讐心に駆られる。そして——それから 数ヵ月間、Scotland スコットランドの 批評家達への挑戦状をたたきつけることに没頭し、逆に、詩人を 意欲的詩作へと奮起する決意を固めさせる。そして遂に、翌年1809年3月、‘English Bards, and Scotch Reviewers’を匿名出版へとふみきった！〔次稿、後述〕

これは、まさに、圧巻である。若冠21才にして、Byron の打ち建てた——古今東西を通じてその類をみない——金字塔であった！ みづからの荒れた青春への送葬曲であった！ 錚錚たる当代の詩界の老大家、数十人を敵に回し、単身、彼のたたきつけた壮絶な果し状であった！

The *Edinburgh Review*, he felt, had 'knocked me down', but, he added, 'I got up again'. Got up and hit back, milling around, as Gentleman Jackson had taught him, against all and sundry in a 'ferocious rhapsody' entitled *English Bards and Scotch Reviewers*. He was revising it at Newstead for publication in March 1809.

Prepare for rhyme—I'll publish right or wrong:

Fools are my themes, let satire be my song.

Though Byron's theme was 'fools', he did not fail to praise the Augustan poets, especially his life-long idol, Alexander Pope. And among the 'fools' he numbered not only Robert Southey, whose 'teeming muse' was to be a perpetual thorn in his flesh, but also many poets whom he was later to admire: for instance, 'mournful' Scott, 'simple' Wordsworth, 'turqid' and 'tumid' Coleridge, and his own guardian Lord Carlisle, a poetaster, was also denounced for 'paralytic puling'. (E. L.)

少年時代を Scotland スコットランドの山河に過した 数寄な運命、そして、そこに育んできた不撓不屈の、負けじ魂 ^{いき}こそ、息 絶ゆる日 まで、止むことのなかった、バイロン魂、バイロン文学の ルーツ であり、狂へる如く、今、彼は、多くの仇敵へと身構へ、これを 一人、一人、たゞきつけてゆく。——売られた喧嘩は、いつでも買うぞ！ と身構へる喧嘩名人 バイロンの面目躍如たる からださばき——であった。

Elizabeth Longford 女史——バイロン文学の最も良き理解者である——は、'Hours of Idleness' '懈怠集' を評して、「たゞ、いまだ表面に浮び^{あが}上らざるとするも、たゆたふ イメージとして、この処女詩集にこそ、

この詩人の成熟のいくつかの片隣、特徴をはっきりと うかがい 知ること

ができる。Edinburgh Review の批評は全く不当である——
として、詩人の才を激賞している。
——そして、次のことを指摘している。

この詩集には、

- 1) バイロンの全生涯を解く鍵となるべき、漂っている一つのテーマがある。
- 2) 多分 John Donne からのものと思われるが、その最高傑作 は掲載されなかったが、いくつかの 模倣的とみなされる秀作がある。
- 3) 後々の彼の詩で、再循環することになったいくつかの詩行とリズムがある。

I would not lose you for a world'

‘世界をかけても、絶対に僕は君を失うことはしない’
と断言したのは、ある女性に向けて、言った文句であり、それはやがて、
‘Sweet Florence’ of Marta として後にうたわれるのである。

とのべている。

1808年の春（詩人20才） Cambridge ケムブリッジ大学を卒業したのであるが、この新年を迎え、次の一年半、つまり、1809年7月 巡礼 Pilgrimage の旅へと Falmouth より Hobhouse と共に船出する迄の間、詩人にとって、嵐の青春、ロンドンでの旋風が吹きまくるのである。そして、又詩人にとって襲いくる Newstead への、ぬぐい難い郷愁は 寒風 吹きすさぶ如く 膚をつんざく熾烈なものであった。——

それは過去への訣別の心であった！

親友の Hobhouse ホブハウスに

“僕は今、酒池肉林の底なし淵に 巻きこまれた！ 昨夜も、7人の売春婦と 女将、ダンス教師 と 交歓。醒めて、僕をまつものは、文学的誹謗、金欠病、そして 全身的無気力！” と書きおくっている。

“The wayward weathercock” which was Byron, however,

“わがままな、気まぐれな 風見”

Elizabeth Longford は 詩人を そう呼ぶ。母 Catharine の血を、父 Jonnie ジョニーの血を、Celt ケルトの血を、Viking ヴァイキングの血を そのままに うけついで 詩人が、その荒んだ Cambridge ケムブリッジ大学での遊蕩の日々を傍若無人に振舞い、母より口ぎたなく罵られるとき、そして、それは育いたちし幼少の頃よりの仕打に耐えた過去ゆえに——母でもない、子でもない——あの女 that woman! と遂に呼ぶ に至った憎しみは つのるばかりであった！

な 風見の日 の‘風見’ weathercock は 無用の長物である。風見は 風の吹くままに 風向を指差して、ゆるく、あるときは激しく揺れる、廻る。

詩人バイロンの 変り易い心と激しい癩性は母譲りのものである。気まぐれ 風見の如き——詩人の癩性と 母キャサリンの癩性が激突するとき、そしてそれは、四六時中 そうであったが、詩人にとって 憩うべき、やすらぎの 家があるべくも なかった！ 放浪の青春、放浪をもとめての詩人の生涯！

そう、生きるべき星を、そのままに生きた詩人は 弱者であり、それを見せまいとするポーズを忘れなかった強者であった。

1805年4月23日付で、姉 Augusta アウグスタ宛に書き、

“僕は、誰からも、僕が母と呼ばねばならぬあの女——Catharine——からほど、口ぎたなく、激しく罵られたことは いまだにないのです。かりそめのことばではなく、天地神明に誓って、そう申しあげたい。

ほんの1時間足らずの間に、僕自身のことだけでなく、僕の父方のものたちまでが、みな、きけば ショックをうけるようなありとあらゆる罵言を浴びせかけられるのです。姉上 Augusta オーガスタ、それが僕の母なのです。僕の母！僕はもう、今後、あんなのを、母とは認めない！”と、

異母姉 Augusta オーガスタ に、その憤りの心を訴えたのは、Harrow ハロー校の卒業学年であったが、さらに、1808年ケムブリッジの卒業の年、やはり Augusta オーガスタに宛て、

“僕はあの女——母のこと——は絶対に許さない。共に同じ屋根の下で絶対に暮すことはしない！”と、

益々その募りゆく母への憤りを、陰悪な、完全に冷えきった仲を、書きおけている。

詩人を溺愛すればこそ、溺愛がことのほか激しければこそ、一縷の希望を、一筋の光を、愛児の成長のみに託し期待した母 Catharine の、その胸中は……

母 Catharine キャサリンは——

その癪性が激しければこそ、名門 Gordon ゴードン家の誇りが強ければこそ、Celt ケルトの血が騒ぐがゆえに、今は亡き夫 Jonnie ジョニーへの想いが Byron バイロン家への、燃ゆる憎悪の炎をかきたて、極言までの罵詈雑言が愛児 Byron バイロンへ、そして 詩人の異母姉 Augusta オーガスタへとたたきつけられた、その胸中は、充分に肯けるとしても——今、“この子、生れざりしならば……” との想、感懐 は ひとしお深かったことであろう。

酒と女、売笑婦と戯れ、賭けごと、酒池肉林、Eldestone エルデストーンとの Homosexual な生活への耽溺、学寮の一室に bear (熊) を飼う

——“熊は我が友ゆえに同居す”と放言し、

学業を放棄して、思いのままに、——母の、そして Hanson ハンソンの、
 慨嘆^{なげき} をよそに、みづから 吸血鬼とよんだ 高利貸の世話を 仰いでまで、
 Cambridge “ケムブリッジの遊蕩児” の名を ほしいままにした詩人 は——

母 Catharine が、世人が、これを誹謗するとも、詩人にとって、“そう
 生きるよりしかたがなかった！”とみづから言い放ったことも 真実の生き態^{さま}
 であった。自己を偽^{いつわ}ることをしなかった詩人である！

この蕩児を産んだ 根深い ルーツ を思うとき 母への、世人への、叛逆
 は、Cambridge ケムブリッジへの憎悪 は、詩人の青春の魂を揺さぶりつ
 つ また ひとつの新しい台風の眼を生みつつ、吹きすさぶのであった。

それは——

1808年、春、Cambridge ケムブリッジ大学を卒えるころより、——次の一
 嵐を経て——かの ‘Grand Tour’ を想い発つのである。旅立たねばならなかつ
 たのである。

祖国を追われるごとく 巡礼の旅——Childe Harold’s Pilgrimage——へと
 むかわねばならなかった、そうしなければならなかった、絶対的^{絶対的}ルーツを
 この詩人の Cambridge ケムブリッジ青春の揺さぶりの中に、その生き態^{さま}の中
 に、凝視^{みつ}めることができるであろう。

(未完、次稿へ)

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchinson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron. Lewis Prints.
- 3) Francis, M. Doherty: Byrons.
- 4) Leslie, A. Marchand: Byron’s Poetry, John Murray.
- 5) Herhert Read: Byron.
- 6) John, D. Jump: Byron Routledge & Kegan Paul.